「エンジェル　フライト」って、知ってますか？

新聞書評で「海外で亡くなった日本人、日本で亡くなった外国人の送還に必要な手続きを行い、防腐処理や化粧を施して遺族の元に送り届ける。本書はなかなか表に出ないその職業の内実を教えると同時に、死との向き合い方を我々に問いかける。」が目に止まり、昨年の開高健ノンフィクション賞を受賞した「エンジェルフライト～国際霊柩送還士～」を購読した。

著者は女性フリーライターで、事務所が羽田空港内のビルにある日本で最初の国際霊柩送還の専門会社で働く人々と遺族の取材を通して、人を弔うことの意味を我々に問いかける書であった。

外国での事件、事故で亡くなり、また、外国から搬送するだけに時間が経っていたり、傷ついていたり、腐敗が進んでいる遺体も多いが、この会社の人々は昼夜を問わずに霊柩送還に身を削って対応している。
遺体を出来る限り生前の表情に戻してあげるために傷があれば隠し修復し、顔色や唇の赤みを化粧で整えて、身体を綺麗に拭いてあげたりと、全てを丁寧に、心を尽くし、生前のその人をきちんと思い起こせるように、きちんと悲しみ、遺族が本当の意味で「最後の再会」になるようにと遺族に寄り添い、最後は「忘れて貰った方がよい」と言う国際霊柩送還士の真摯な仕事ぶりには敬服する。

若い国際霊柩送還士は､遺体一人一人の背景・事情が異なることからマニュアルがなく、遺体に真摯に丁寧に向き合うことでしか学び得ないが多いだけに、自分のやっているのは「仕事」でなく「死事」と言う。

著者は、「遺族に生前に近い姿で再会させたい」との願いから想像を絶するこの心身共に過酷な仕事に携わる国際霊柩送還士や、ひたすら「会いたい」と願う遺族の取材から、肉親との別れの悲しみをくぐり抜けた時、「亡き人はきっと別の形で戻ってくる。そばにいて励まし、力を与えてくれる存在になる。」と確信し、弔いの真の意味を改めて考えることを我々に問いかけてくる。

この本を読んでいる途中でも、アルジェリアやグアムの事件があった。
報道では空路コンテナに収めてられて帰還した様子が映し出されていたが、報道されることはまずないだろうがこの陰では、この会社の国際霊柩送還士たちが係わっているのだろうなあと、想像した。

これから外国に行かれる予定のある方は、外国で何があるか分からない時勢だけに、本書を目にしてからの方がいいように思う。

阿部幸泰　　（2013 年 2 月 16 日　記）